

1880年代の近代沖縄と石澤兵吾—〈勸業行政〉 〈『琉球漆器考』成立背景〉〈琉球の絵師及び木脇啓四郎〉—

栗 国 恭 子

はじめに

近代沖縄の殖産興業政策と産業（工芸）の在り様を捉える際に、どのような視点が必要なのであろうか。

私達が思っている以上に近代の時間は大きな変化をもたらし、その多くその記憶は沖縄戦によって消えていく運命を辿ることも少なくなく、その文化要素のあり様を大きく変えた。特に近代国家日本が展開する殖産興業政策（植民地展開をからめて）の元で行なわれる産業工芸要素においては顕著となり、その中に琉球漆器や宮古上布などの織物もある。

1879年（明治12）の琉球処分で、沖縄県が誕生し日本の一部の歴史が始まる。従来、この時期を扱う歴史研究は、〈琉球処分〉のあり様を中心に展開している。また、いわゆる〈旧慣温存期〉研究は、王府時代の制度的な温存政策（旧士族層優遇、士族税制etc）に着目した研究が中心的で、急激な変化、近代日本の殖産興業政策が沖縄において展開される社会を捉えた研究は糖業関連以外には少ない状況である。特に日本の近代期を通して殖産興業の目的で盛んに開催された博覧会と沖縄の関係をとらえる研究も少ない⁽¹⁾。さらにその研究成果は県令や知事の業績を通しての明治政府と琉球の関わりが中心で、つまるところその任期が数ヶ月から数年と短い任期で入れ替わる県上層部への注目において近代沖縄が語られることが多く、知事の下で政策実務（沖縄県官員）を行う側から近代社会をとらえた研究は、極めて少ない状況である⁽²⁾。

本稿では、日清戦争前の1880年代の沖縄県庁勸業課（勸業係）の幹部官員として勤務した石澤兵吾（明治14年～明治22年まで勤務）を通して、近代沖縄の文化・工芸における変化に注目したい。時間的には10年間にも満たないこの時期に、いくつもの新しい近代化システムへの参加が沖縄社会において見られるのである。

従来では〈旧慣温存期〉のこの時期の沖縄社会は、スタティックなものとして理解されることが多く、この時期の評価を「事なかれ主義」の時代とする立場もあり^③、こうした認識に対し、本稿は〈勤業〉面から資料を整理し、特に今回は新しい近代国家日本の行政枠との関わり、近代産業システム、特に今日伝統工芸・沖縄文化（芸術）分野においてその中に取り込まれ、急激に変化する近代沖縄社会の一面に触れたい。

また、石澤の沖縄赴任中には、沖縄産業界への殖産政策展開が多様になされており、その一貫として国内外博覧会（共進会）への参加、九州各県との経済的ネットワークの確立（九州各県で持ちまわりで開催される連合共進会）とともに他府県との交流（人材交流を含む）、市場の中に取り込まれる状況が生まれる。その結果、現代の沖縄〈伝統文化〉認識に繋がる〈枠組〉が強化されるあり様が見える。本稿では、その理解に務めたい。

1、石澤兵吾一実務を担う官員として一

(1)行政組織と勤業課

石澤は勤業関係の官吏として約8年間沖縄で過している。その時期は1881（明治14）年7月に設置された農商務省の組織編成の結果、農務と商工系業務が統合される時期と重なり、農商務省管轄の業務と深い関わりがあることを意味している。石澤が沖縄に赴任した時期は、農商務省は、官房をはじめ、庶務・農務・商務・工務・山林・郵便・博物・会計・管船の9局編成であった。その後、農商務省設置以来農務局内で業務を行っていた水産・地質資源分野が、1885（明治18）年に水産局（2月）と地質局（12月）に独立し、翌年2月には、新しく鉱山局、専売特許局などが新設され、また、農商務省にあった博物局（明治14年設置）も廃止されている。1886（明治19）年2月には、農商務省は、大臣官房、総務・農務・商務・工務・水産・山林・地質・鉱山・専売特許・会計の10局編成となっている（2月27日官制）。このような新しい国の中央省庁での変動が激しい組織編成に合わせて、地方行政業務も連動して行なわれることは基本的に理解できよう。

後述の明治10年代国策としてなされた国史及び農書編纂事業、水産調査、農産物殖産、工芸産業奨励など、細分化された各局業務に対応する沖縄県組織も変化を見せる。

琉球処分の間もない1881（明治14）年の沖縄県庁は、6課（庶務、租税、記録、学務、衛生、出納）編成で、勸業係は租税課に属している。この時期の職員上層部の多くは、長崎県出身者という特徴がある。江戸時代から幕府の貿易窓口として位置付けられ海外との貿易に長けた長崎の官員が、初期沖縄県運営に揃えられたのだろうか。琉球と中国（清）との貿易へ配慮した人事とも考えられる。

石澤兵吾が沖縄県勸業係への赴任は明治14年2月で、第2回内国勸業博覧会（3月開催）を目前にした時期である。さらに翌年長崎で開催される第1回九州各県連合共進会の対応においても、沖縄県庁の＜勸業＞関連行政業務が求められる時期で、勸業係職員強化を目的とした赴任の可能性が高い。

1883（明治16）年（上杉茂憲県令期）には、勸業課は独立した課で農務係、商工係、土木係、山林係、報告係で構成されている。その担当業務は多岐に渡っている（表1参照）。

しかし、5月には新任岩村通俊県令の元で組織改革があり、学務・衛生・勸業課を廃止して、学務・衛生事務を庶務課に、勸業課事務を租税課（地租係、収税係、地理係、勸業係、報告係、土木係、山林係）に統合し、以前の農務係と商工係を統合して勸業係とし業務を行なう変化があった（号達「丙第35、36号5月24

表1 沖縄県勸業課業務（明治16年）

	係名	主な担当業務
沖縄県 勸業課	農務係	勸業、農事試験場、開墾、水産、牧畜、獣医、鳥獣猟、坑山、地質調査、甘藷坪数、黒糖審査、蘇鉄及び芭蕉、勸業貸下金、前貸納、樽木及び帯竹、砂糖樽製造及び烙印関係
	商工係	勸商勸工、諸工場起廢、度量衡並び鑑札、諸会社、発明品専売免許及び商標、諸営業願、市場関係
	土木係	道路橋梁堤防河港溝渠溜池など築造修繕及浚疏のこと、市街並び往還筋等において家屋建築あるいは板囲土石置場、水界流域河脈水勢治理、堤塘及び並木敷地貸渡し関係
	山林係	山林調査並び保護、山林植栽並び伐採など、竹林、水源涵養土砂扞止に関する樹木植栽及び芟伐願い、道路に属する樹木の樹栽培養及び倒木枯木処分、用材雑材調査、薪炭調査関係
	報告係	農工商通信の諮問応答関係、農事報告、物産及び輸出入調査、物産表物価表及び輸出入関連、家畜調査及びその他報告製表関係、天産人工の古物保存又は蒐集関係、農工商奨励上褒賞関係、勸業委員関係

「本県庁則更正ノ件」『沖縄県史料近代3』より作成

日])。よって石澤も租税課付けの役職(正式役職不明)で業務に当たることになるが、その業務内実は差ほどの変化はない⁽⁴⁾。また、この年には編纂課(本務係、記録係、地誌編纂係)が新たに独立し、翌年までに「旧藩制度沿革等取調」に関する書類などは編纂課へ引継が行なわれた年でもある。しかし、この組織改革は長くは続かず、翌年の明治17年には再度の組織改革により勸業課は復活していく。

石澤は1884(明治17)年以後沖縄県庁を退職するまで、勸業課のトップを務めた<勸業専門>官員である。

(2)石澤兵吾の人となり

石澤兵吾(写真①)については、『琉球漆器考』を編集した沖縄県勸業課長として歴史・工芸分野では知られているが、その生涯は、詳細にはわかっていない。野々村孝男によって示された石澤の人物像以外に、その人となりに触れた研究もほとんどない⁽⁵⁾。



写真①

1853(嘉永6)年3月30日新潟県出身士族で、1919(大正8)年12月4日66歳で亡くなるまでの人生は、その仕事を<勸業>行政に関わった官員の仕事が中心である。野々村は、石澤が明治14年～明治22年まで勤務した沖縄での業績を、①友寄喜恒の三点の絵画を博物館へ寄贈したこと、②『林政八書』(1885年)編纂、③著作『琉球漆器考』刊行の3点にまとめ紹介している。しかし行政機関官員業務という枠組みで捉えれば、<個人業績とは何か>という問いが生れる。ここでは、これらの野々村が示した石澤の業績・経歴を改めて検討し、勸業課業務と照らし合わせながら、より具体的な資料をもとに可能なかぎりその詳細にせまりたい。

先に<石澤兵吾の年譜>を示し、その中からいくつかの要素を詳しく取り上げることとしたい。

<石澤兵吾(いしざわひょうご)年譜(1853-1919)>

*1853(嘉永6)年3月30日新潟生まれ(士族)。

*1881(明治14)年 29歳

・2月 沖縄県9等属(「官員録」彦根正三編 博公書院 国図YDM5350)、

正確な赴任時は不明であるが、官員録で確認できる最初である2月を配属期としておく。

- ・3月 第2回内国勸業博覧会（東京・上野3月1日～6月30日）対応。
- ・4月 那覇市古波蔵に勸農試験場設置（国費経営・担当：勸業係）。
- ・7月 友寄喜恒の沖縄風俗図3点を農務省博物局（現在東京国立博物館所蔵）に寄贈。
- ・9月 九州6県連合共進会へ沖縄県加入。

*1882（明治15）年 30歳

- ・沖縄県7等属（勸業課）
- ・1月12日 各間切に勸業委員1人設置、勸業課対応。
- ・10月1日～10月30日（30日間）長崎市で第1回九州沖縄5県連合共進会（煙草・砂糖・麻苧・繭・生糸・織物6種）が開催され、勸業課も対応。
- ・日本画の振興奨励並びに保存保護を目的とする第1回内国絵画共進会（東京・上野・10月1日～11月20日）開催（農商務省管轄）、県窓口は勸業課。
- ・12月 ドイツ（プロシア）王国博物局人種学部（ベルリン民族学博物館長・アドルフ・バステイアン）備品用「琉球諸島之品人種学上関係」資料採集依頼（農商務卿西郷従道から上杉茂憲県令へ協力要請）、勸業及び庶務課対応。

*1883（明治16）年 31歳

- ・第1回水産博覧会（東京・上野・3月1日～6月8日）勸業課対応。沖縄県参加2件。
- ・6月 勸業係で農事試験場に導入したのがアメリカ式の改良製糖車（鉄製三軸縦式）使用奨励。
- ・10月20日～11月28日（40日間）鹿児島市興業館で第2回九州沖縄5県連合共進会（煙草・砂糖・麻苧・繭・生糸・織物6種）が開催されている。開会式には農商務卿・西郷従道参列。沖縄からは勸業課の石澤の部下・竹津友（山形出身）・松村嘉射（沖縄出身）が会期中事務担当。

*1884（明治17）年 32歳

- ・勸業課課長心得6等属
- ・2月 農商務省博物局（局長・野村博）から博物館列品資料（天産・工芸・芸術・史伝・図書）採集依頼が西村捨三県令あてに依頼。大書記・森長義、

勸業課・庶務課対応。明治17年及び18年2回に分けて博物局購入。この年の納品には友寄喜恒、仲宗根の絵画（「花鳥図」「山水図」）も含まれる。

- ・2月 尚典の帰国、夏の旧琉球王・尚泰帰国に向け県令・西村捨三指示で道路、那覇港御物城を整備し博物館を開設準備始まる。勸業課対応。
- ・第2回内国絵画共進会（東京・上野・4月11日～5月30日）に佐渡山安豊「山水画」出品。この時期の佐渡山安豊は勸業課御用掛准等外であり、県勸業課属の記録絵図を担当している。
- ・8月 那覇港御物城を整備し、沖縄物産陳列所（博物館）を開設し砂糖審査会及集談会開催、管内の物産を蒐集・陳列する。有栖川宮幟仁親王来県及び元国王・尚泰帰県。
- ・10月 帰県中の尚泰歓待の宴を沖縄物産陳列所（博物館・博覧会場）で執り行う。
- ・11月 熊本で開催された第3回九州沖縄8県連合共進会（熊本新町、11月1日～30日）参加。部下の竹津友（山形出身・10等属）が担当。

*1885（明治18）年 33歳

- ・勸業課課長心得5等属
- ・繭・糸・織物・陶漆器共進会（東京）関連業務
- ・9月～10月 久米赤島・久場島・魚釣島の三島調査、同行メンバーは久留彦八（県10等属）、神尾直敏（警部補）、藤田干次（御用掛）、伊東祐一（巡查）、柳田弥一郎（巡查）。港湾や形状、土地物産開拓可能性有無を調査。『魚釣島外二島巡視取調概略』（明治18年9月21日）作成^⑥。この年に農商務省に水産局が独立局として出来、水産物の殖産化が本格的に検討されて時期で、この調査は水産物・鉱物資源の実態調査と離島・無人島の開拓を探る目的で行なわれている。
- ・9月 首里織工場へ士族授産金下付、勸業課対応
- ・10月 第4回九州沖縄8県連合共進会（佐賀市松原開催、10月1日～11月9日、実綿・生糸・織物・砂糖・茶・繭・鯛の7種）参加。
- ・12月上旬 沖縄県『林政八書』刊行。大書記・森長義、石澤の下、仲吉朝愛（8等属）、太田祥介、黒川作助（10等属）、仲嶺眞愛ら勸業課職員によって編さん作業がなされた。

*1886 (明治19) 年 34歳

- ・ 勸業課課長心得 4 等属⁽⁷⁾
- ・ 3 月 山県有朋内務大臣の来沖、対応

*1887 (明治20) 年 35歳

- ・ 勸業課課長属判任 4 等
- ・ 2 月 第 5 回九州沖縄 8 県連合共進会 (福岡区新地 (中州) 開催、2 月10日～3 月31日、米・ 榧蠟・ 茶・ 繭・ 生糸・ 織物) 勸業課対応。
- ・ 5 月下旬 4 月27日就任し 5 月上旬に沖縄に赴任してきた新任の福原実知事巡検に同行し、久米島、宮古、八重山、与那国の諸島巡見。殖産工芸及び琉球漆器について話す。
- ・ 7 月頃から「琉球漆器考」の絵図を部下の佐渡山安豊・ 木脇啓四郎に写しを指示し、自らは琉球漆器沿革をまとめはじめる。同時期に、第 3 回内勸博の陳列のために木脇啓四郎に琉球の植物真写図を依頼する (『花草類真写図』)。
- ・ 11 月21日 伊藤博文総理大臣、大山巖陸軍大臣、画家・ 山本芳翠ら来沖。
- ・ 11 月 文官普通試験委員を務める (委員長立木兼善、委員石沢の他 5 名)。
- ・ 12 月 第 3 回内国勸業博覧会出品内容規約告示が出され、勸業課はその業務に関わる。
- ・ 御物城博物場 (館) にて砂糖審査会 (7 日間)。

*1888 (明治21) 年 36歳

- ・ 勸業課課長
- ・ 2 月 第 6 回九州沖縄 8 県連合共進会 (大分県大分市開催、2 月20日～3 月31日) 勸業課対応。
- ・ 4 月～11 月 農商務省水産局・ 松原新之助 (農商務省技師) ら沖縄の水産物調査で来沖、石澤を初め勸業課職員や木脇啓四郎などが対応。『沖縄群島水産志』 (明治22年 3 月刊行)
- ・ 御物城博物場 (館) にて砂糖審査会 (9 日間)。
- ・ この頃に田中芳男・ 松原新之助や河原田盛美などが会員である大日本水産会会員となり、『大日本水産会報告』 74 号に「ジュゴン (儒艮)」「海獣諸件」を報告掲載。

*1889 (明治22) 年 37歳

- ・ 2月 第7回九州沖縄8県連合共進会（宮崎県開催、2月20日～3月31日）
勸業課対応。
- ・ 3月 沖縄県庁退職
- ・ 10月 『琉球漆器考』沖縄県庁御蔵版刊行。印刷・東陽堂
- *1890（明治23）年 38歳
 - ・ 10月 農商務省総務局第4課属判任官3等上級、下谷区根岸金杉276番（「職員録（農商務省）」国立公文書館 レ：A09054416200 簿：A00732100）
 - ・ このころ第3回内勤博事務局～明治24年3月31日
 - ・ 11月 『琉球漆器考』石澤兵吾著作として東陽堂から刊行。
- *1891（明治24）年 39歳
 - ・ 3月31日 第3回内勤博事務局解散。農商務省官房博覧会課書記官属3級（新潟土族）。この時期農商務省次官兼農務局長・西村捨三（「官員録」明治24年10月1日印刷）。
- *1893（明治26）年 41歳
 - ・ 農商務省博覧会課書記官属3級（「官員録」内山正如編、国会図書館YDM5352）。「官員録」6月までは記録されているが、8月には石澤の名前は見あたらない。この年シカゴ・コロンプス博覧会（5月1日～10月30日）に出張にも出向く。博覧会課書記官も長：柳谷謙太郎、鈴木大二郎の3人から2人体制になっているので、石澤の何らかの事情で退職・休職か。また、翌年11月の「官員録」には、農商務省博覧会掛書記官長に手島精一の名前があることから、博覧会担当の体制が変わり、より近代教育を受けた専門性の高い職員配置の方向性の変化が打ち出されたか。
- *1896（明治29）年 44歳
 - ・ 福島県内務部第5課課長2等属（「官員録」内閣官報局、明治31年1月）
- *1897（明治30）～1899（明治32）年 45～46歳
 - ・ 福島県耶麻郡役所（喜多方町）郡長 出納管理（第7）（「官員録」明治32年4月29日発行）M33年3月まで勤務か？。
- *1901（明治34）～1902（明治35）年 48～49歳
 - ・ 2月 福島県耶麻郡役所（喜多方町）郡長退職、新潟県判任官へ転任。（国立公文書館本館－2A－018－00・任B00256100）

- ・3月から 新潟県内務部第4課長 属2 従7 (「官員録」明治34年7月20印刷、明治35年8月20日印刷)
- ・9月5日新潟県刈羽郡役所郡長に任命。
- *1903(明治36) - 1905(明治38)年 50-52歳
 - ・新潟県刈羽郡役所(柏崎町)郡長 従7
- *1905(明治38)年52歳
 - ・春頃?、日露戦争出兵歓送迎のための蒔絵菓子器(「旭日朝露蒔絵菓子器」を川之邊一朝(帝室技芸官)に蒔絵を注文^⑧)。
 - ・10月3日新潟県刈羽郡役所(柏崎町)郡長を病氣(脳神経衰弱病)のため依願退官辞表提出。(東京都麹町区永田町2丁目29番地。柏崎町1930番地)同月25日退官。(「新潟県刈羽郡長石澤兵吾以下四名依願免本官ノ件」国立公文書館本館-2A-019-00・任B00416100)
- *1919(大正8) 66歳
 - ・12月4日 脳溢血で無くなる。墓は青山霊園(8区口一種510一側2畳)。

1881(明治14)年2月沖縄県への赴任は、石澤のその後のキャリアを考慮にいと勤業係職員採用であろう。29歳で赴任(9等属)してから1889(明治22)年・37歳までの働き盛りの時期を沖縄県勤業課(勤業係)勤務で過している。特筆に価するのは、約8年の沖縄勤務では、初代県令の鍋島直彬(任期:明治12年4月~明治14年5月)、上杉茂憲(任期:明治14年5月~明治16年4月)、岩村通俊(任期:明治16年4月~12月)、西村捨三(任期:明治16年12月~明治19年4月)、大迫貞清(県令・知事任期:明治19年4月~明治20年4月)、福原実(任期:明治20年4月~明治21年9月)、丸岡莞爾(任期:明治21年9月~明治25年7月)と7人の県令・県知事の下で勤業関連業務を務めたことである(表2参照)。任期の短く移動の激しい沖縄初期県政時期に、7人の県令・知事の部下で勤めた県庁幹部官員はそれほど多くはない。

また、石澤の沖縄赴任期間中の5年間を、大書記・森長義(山形米沢藩出身、任期:明治15年10月~明治20年3月)とともに勤めていることも注目し得る。任期の短く交代の激しい県令・県知事と違い、上幹部官員としてこの2人は比較的長く沖縄県庁の実務を担当しているのである。大書記・森長義は近代史研究で

表3 明治17年～19年沖繩県知事・大書記・勸業課職員

栗国恭子作成

明治17年1月～8月			明治18年2月(2月4日調べ)			明治19年5月(5月27日調べ)		
役職・担当	名前	出身	役職・担当	名前	出身	役職・担当	名前	出身
県令	西村捨三	滋賀	県令判事 (内務大書記兼務)	西村捨三 (明治19年4月27日まで)	滋賀	県令兼判事	大迫貞清	鹿児島
大書記	森長義	山形	大書記兼 検事	森長義	山形	大書記兼 検事	森長義	山形
御用掛 准 奏任	池田成章	山形						
勸業課			勸業課			勸業課		
課長心得 六等属	石澤兵吾	新潟	課長心得 五等属	石澤兵吾	新潟	課長心得 四等属	石澤兵吾	新潟
七等属	松本茂	福島	八等属	藤井伝八	佐賀	勸兼庶六等 属兼農商務 省七等属 (M18. 6月 ～) *	田代安定	鹿児島
八等属	巖岸佐多之佐	宮城	八等属	仲吉朝愛	沖繩	七等属	藤井伝八	佐賀
警部補・ 八等属	藤井伝八	佐賀	会兼勸 八等属	鶴見愛孝	埼玉	七等属*	松枝太一	佐賀
警部補・ 八等属	仲吉朝愛	沖繩	八等属	太田祥介	長崎	七等属	太田祥介	長崎
会兼勸 九等属	鶴見愛孝	埼玉	九等属 勸兼庶	山田鉄一	佐賀	七等属	鶴見愛孝	埼玉
九等属	山田鉄一	佐賀	九等属	松村嘉射	沖繩	八等属	竹津友	山形
九等属	久米長順	沖繩	九等属*	藤田好成	新潟	八等属	仲吉朝愛	沖繩
九等属	松村嘉射	沖繩	九等属	竹津友	山形	八等属*	間世田正信	鹿児島
十等属	竹津友	山形	十等属	坂井了爾	岐阜	九等属	黒川作助	鹿児島
十等属	坂井了爾	岐阜	十等属	黒川作助	鹿児島	十等属	吉村克巳	東京
御用掛 准判任	庄田享吉	山形	十等属 勸兼庶*	吉村克巳	東京	等外一等 出仕	金城順盛	沖繩
等外一等 出仕	大橋哲夫	鹿児島	十等属*	牧野勘容	滋賀	等外一等 出仕	酒井七郎	東京府
等外二等出仕	金城順盛	沖繩	十等属*	仲嶺眞愛	沖繩			
等外四等出仕	酒井七郎	東京府	十等属	庄田享吉	山形			
御用掛 准等外	佐渡山安豊	沖繩	等外一等出仕	大橋哲夫	鹿児島			
御用掛 准等外	黒川作助	鹿児島	等外二等出仕*	嘉数詠顕	沖繩			
			等外二等出仕	金城順盛	沖繩			
			等外三等出仕	酒井七郎	東京府			
			御用掛 准 等外 勸兼庶	佐渡山安豊	沖繩	那覇役所 御用掛 准等 外勸兼庶	佐渡山安豊	沖繩

*は新任、役職・担当欄では、会計課は「会」、庶務課は「庶」、勸業課は「勸」の一字で表記。

取り上げられることは少ないが、沖縄を離れた後、鹿児島県奄美大島島司（明治21年7月？～明治24年3月）を務め糖業・織物殖産政策を試みる人物でもあり、石澤とともに1880年代の沖縄勸業関連では今後検討に値する人物である。

さらに1886（明治19）年、鹿児島出身の大迫貞清県令、大書記・森長義、石澤が勸業課長心得（4等属）の体制時代に、農商務省（7等属）から出向し沖縄県庁に勤める田代安定（勸業兼庶務・6等属）が部下配属されて（表3参照）、沖縄の調査を行っている。石澤と同時期の県庁官員では田代以外には、横内扶（庶務兼衛生課6等属）、黒川作助らがいる。田代安定は1875（明治8）年内務省御雇・博物館掛として就職し、4年間を田中芳男の元で植物学の研究で働いて、第1回内国勸業博覧会事務局業務を務め、鹿児島に出向の形で1880（明治13）年には鹿児島県庁勸業課陸産係に勤務する。農商務省命で1882（明治15）年に第1回沖縄出張（規那樹植栽目的）、その成果は「沖縄県下先島回覧意見書」としてまとめられた。設置間もない沖縄県庁官員の石澤と田代・横内との交流も興味深い問題として残る。

石澤は、1889年（明治22）3月沖縄を離れ、農商務省総務局に勤務し、第3回内国博覧会事務局として勤務、1891（明治24）年10月には農商務省官房博覧会課で課長の次ポストの属員（3級俸）で確認できる。また1893（明治26）年には、シカゴ・コロンプス博覧会へ博覧会書記として出張しており、明治26年7月頃まで博覧会課で勤めている。この経歴からも石澤が博覧会通の官員であったかが理解できる。その後、福島県耶麻郡長の後、1901（明治34）年から1905（明治38）年10月まで新潟県刈羽郡長を勤め、病のため依願退職している。

2、石澤兵吾と勸業政策

(1)博覧会（共進会）への参加

ここでは、勸業課が行政窓口となる政府指導・主催の内国外博覧会と沖縄の関わりを紹介する。明治政府は、近代国家のスローガン「富国強兵」「殖産興業」を掲げ、主要産業（繊維、鉱山、冶金、造船など）の官営工場を各地に設立し、同時に海外で開催される万国博覧会に参加することで機械化導入、輸出産業計画の振興プラン展開も積極的に行なっている。当時の万国博覧会は、各国の産業・科学・美術の発達を比較する場であり情報収集の場として機能しており、日本の商工業

表2 沖縄参加の博覧会（共進会）—明治期—

栗国恭子作成

	西暦	年号	県令・知事	行政担当者	沖縄が参加（出品参加）した主な博覧会
	1867	慶応3			パリ万国博覧会（薩摩藩を通して出品）
	1872	明治5			博覧会（湯島大成殿）古器旧物展示（出品未確認）
琉球藩	1873	明治6			ウィーン万国博覧会（出品未確認）
	1875	明治8		河原田盛美	*内務省那覇出張所 フィラデルフィア万国博覧会出品準備
	1876	明治9	木梨精一郎		フィラデルフィア万国博覧会
	1877	明治10	木梨精一郎		第1回内国勸業博覧会（東京）
	1878	明治11	木梨精一郎		パリ万国博覧会（フランス革命後100年記念）
		1879	明治12	木梨精一郎 鍋島直彬	
	1880	明治13	鍋島直彬		
	1881	明治14	鍋島直彬 上杉茂憲	原忠順・池田成章、多くの幹部が長崎出身	第2回内国勸業博覧会（東京・上野）
	1882	明治15	上杉茂憲	森長義 池田成章 石澤兵吾	第1回九州沖縄六県連合共進会（長崎）/第1回内国絵画共進会（東京・上野）
	1883	明治16	上杉茂憲 岩村通俊	森長義 池田成章 石澤兵吾	第2回九州沖縄八県連合共進会（鹿児島）/第1回水産博覧会（東京・上野・3月1日～6月8日、約23万人）
沖縄県（旧慣温存期）	1884	明治17	西村捨三	森長義 池田成章 石澤兵吾	第3回九州沖縄八県連合共進会（熊本）・第2回内国絵画共進会（東京・上野）*御物城物産陳列館。博物館整備
	1885	明治18	西村捨三	森長義 石澤兵吾	第4回九州沖縄八県連合共進会（佐賀）/繭・糸・織物・陶漆器共進会（東京）
	1886	明治19	西村捨三 大迫貞清	森長義 石澤兵吾	第1回東洋絵画共進会（東京・上野）
	1887	明治20	大迫貞清 福原実	森長義（後任・立木兼善・猪鹿倉兼文、石澤兵吾（四等）	第5回九州沖縄八県連合共進会（福岡） 第2回東洋絵画共進会
	1888	明治21	福原実 丸岡莞爾	立木兼善・猪鹿倉兼文、石澤兵吾	第6回九州沖縄八県連合共進会（大分）
	1889	明治22	丸岡莞爾	書記官：楡垣直枝、立木兼善、農商課長：太田祥介（長崎・六等）	パリ万国博覧会/第7回九州沖縄八県連合共進会（宮崎）
	1890	明治23	丸岡莞爾	書記官：楡垣直枝（高知）、農商課長心得：太田祥介（長崎・四等）	第3回内国勸業博覧会（東京） 日本美術協会秋季展（東京）

	西暦	年号	県令・知事	行政担当者	沖縄が参加（出品参加）した主な博覧会
	1891	明治24	丸岡莞爾	書記官：檜垣直枝（高知）、参事官：今西相一（沖縄）	
沖縄県 （旧慣温存期）	1892	明治25	丸岡莞爾 奈良原繁	書記官：檜垣直枝（高知）？、参事官：今西相一（沖縄）	日本美術協会秋季展（東京）
	1893	明治26	奈良原繁	書記官：井原昂（群馬）、参事官：今西相一（沖縄）	シカゴ・コロンプス万国博覧会（石澤兵吾博覧会事務局出張） 日本美術協会展
	1894	明治27	奈良原繁	沖縄：展示係・謝花昇、報告係・仲吉朝助、庶務係・野村道安	第8回九州沖縄八県連合共進会（会場：南陽館は沖縄初の洋風木造建築で井上久吉（滋賀出身）の施工。那覇市見栄橋：現県庁所在地）
	1895	明治28	奈良原繁		第4回内国勸業博覧会（京都・鎮西館）
	1896	明治29	奈良原繁		
	1897	明治30	奈良原繁		第9回九州沖縄八県連合共進会（長崎）、水産博覧会（農商務省・神戸）
	1898	明治31	奈良原繁		
	1899	明治32	奈良原繁		第10回九州沖縄八県連合共進会（鹿児島）
	1900	明治33	奈良原繁		パリ万国博覧会
	1901	明治34	奈良原繁		パリ万国博覧会
	1902	明治35	奈良原繁		第11回九州沖縄八県連合共進会（熊本）
沖縄県	1903	明治36	奈良原繁		第5回内国勸業博覧会（大阪）
	1904	明治37	奈良原繁		セントルイス万国博覧会
	1905	明治38	奈良原繁		
	1906	明治39	奈良原繁		
	1907	明治40	奈良原繁		東京勸業博覧会
	1908	明治41	奈良原繁 日比重明	日比重明 秦蔵吉	第12回九州沖縄八県連合共進会（佐賀）
	1909	明治42	日比重明		
	1910	明治43	日比重明		日英博覧会/第13回九州沖縄八県連合共進会（福岡）/第1回貿易博覧会
	1911	明治44	日比重明		
	1912	明治45	日比重明		拓殖博覧会（東京・上野）植民地対象初博覧会

*行政担当者については、明治10年代20年代を中心に記入。

発展には不可欠なものであった。

日本の外国万国博覧会参加は、パリ万国博覧会（1876）、ウィーン万国博覧会（1873）を皮切りに1893（明治26）年までに25回余にわたっている。近代国家として①国威発揚、②機械化による技術伝習、③博物館設置などの主な目的と共に、④輸出振興の強力な施策展開でもあった。国内でも大規模な博覧会、各種展覧会、各種共進会などが開催され勤業重視の流れは加速していく⁽⁹⁾。

1879（明治12）年の琉球処分により日本に組み込まれた琉球・沖縄とこうした政策展開の関係をとらえた研究はそれほど多くない⁽¹⁰⁾。同時に近代沖縄工芸産業研究は充実しているとは言い難い。1881（明治14）年の農商務省設立により殖産興業部門は分離された結果、農商務省は、内務省内博物館（後文部省機関）とともに博覧会・共進会主催の核となる行政部署であり、そのプロジェクトは地方の〈勤業〉の指針でもある。

国主催の博覧会・共進会開催については、2、3年前に開催内容通達（官報など）がなされ、各地の勤業課などが重要な役割を担い、行政窓口となって開催参加に向けての準備が進められていく。開催通達から開催までのこうした流れは、内国絵画共進会、内国勤業博覧会でも同様で、数年間の準備期間を経て博覧会は開催されるのである。

その出品収集は、各府県庁で担当部署を設置し、担当者配置をすることで各地の農商工業者を調査し出品収集・勧誘などが行われた。それ以外にも自費出品人への助成法、資本金貸与、運賃減額など博覧会成功に向けてシステムを作り上げていった⁽¹¹⁾。

表2は明治期に琉球・沖縄側の参加が確認できる博覧会・共進会一覧である⁽¹²⁾。その中で石澤が沖縄県任期中に開催された博覧会は、国内博覧会では、第2回内国勤業博覧会（明治14年、東京・上野）、第1回内国絵画共進会（明治15年、東京・上野）、第1回水産博覧会（明治16年、東京・上野）、第2回内国絵画共進会（明治17年、東京・上野）、繭・糸・織物・陶漆器共進会（明治18年、東京）、東洋絵画共進会（明治19年及明治20年、東京）、第3回内国勤業博覧会（明治23年、東京上野、石澤は準備期間対応）8件、九州各県持ち回りで開催される博覧会は、第1回～7回九州沖縄連合共進会（明治15年～明治22年）の7件、外国博覧会はパリ万国博覧会（明治22年）1件である。このように毎年のように開

催される大型博覧会参加は約16件で、沖縄地元で開催される黒糖やその他の物産品評会などを加えると、博覧会・共進会参加の対応窓口である勸業課業務及びそれらをまとめる課長の石澤がいかに多忙だったか推察できよう。

石澤は当時の勸業状態を「施政の難易は何物にか帰すべき、蓋し縁由一つにして足らざるべしと雖も、之が近因を為すものは民、堵に安じ易く、業を営むと否らざるとに帰せざるべからず。熟々本県の状態を按するに百事内地府県に異り、民未だ其緒の安ぜらる者なしとせず。況んや本県の土地柄、外交上至大の関係を有するに於いてをや。宜しく民業の進否を講究し、以て安堵自営の方法を謀らざるべからず。是れ目下緊急の要件なりと信ず」と勸業振興の重要を述べている。〔『真境名安興全集2巻』109頁〕

近代沖縄が参加した博覧会の詳細な内実については、別稿に譲る事とする。

(2)『琉球漆器考』成立の背景

従来石澤兵吾の理解は、『琉球漆器考』（後述は『漆器考』）著者として一般には知られている。その『漆器考』は、石澤がまとめた琉球漆器沿革と描かれた琉球王府時代の漆芸品絵図資料について、同類資料も残されていないため、琉球漆器研究の貴重な刊行物と位置付けられており、今日に至るまで美術工芸分野・歴史分野でも重宝資料として紐解かれ読図されてきた。

しかし、この著をまとめた石澤兵吾という人物については、あまり関心がもたれていない。ここでは『漆器考』刊行の背景に視点を広げて、当時の勸業課課長としての石澤の仕事にふれたい。

その刊行経緯について、石澤によると次のようになる。

沖縄県知事に就任したばかりの福原知事（1887：明治20年4月14日就任）と5月下旬、久米島・宮古・八重山、与那国の諸島巡見に同行した。その際に殖産工芸の話題になり、沖縄県で有名な漆器については王府時の官営から廃藩置県後に民業となり官設事業の組織が皆無であり、王府時代の漆器政策に関わる周知な文書・図画は引継がれて残されているが、王府時代の漆器同様のものが得られるかどうか危ぶまれ、また過去に砂糖・小禄布・漆器・泡盛の順で四大物産といわれた漆器が近年に評判を落としている旨を伝え、今後の漆器産業へ憂慮を知事に説明したという。後日知事が県庁に保管された首里王府貝摺奉行所の引継文書（一

個の長持ちに充満する量)から、図画中の漆器を福原知事自身が選定し、それを石澤は、当時勤業課兼那覇役所の御用掛准等外を勤めていた画家・佐渡山安豊と鹿児島県出身の木脇啓四郎(沖縄県農業試験場雇)の二人に図案の写生を指示し、自ら漆器製造関係資料を整理し、沿革などの解説を加え『漆器考』を編集している。

内容は、石澤がまとめた発刊までの経緯、琉球漆器沿革解説、16種の漆器の種類・色の解説、仕様帳(技法や材料・費用など記述)で構成された沿革とともに、1712(正徳2)年から明治22年の178年間に製造された漆器70点余(屏風、中央卓、東道盆、提重、椅子、食籠、印籠など)の製造年代、名称、図案が収められている。

実は、『漆器考』は、従来の研究では指摘されることがなかったが、次の2種類の刊本がある。

一つは、1889(明治22)年10月発行、奥付に「沖縄県庁御蔵判」と記され、東京市日本橋の東陽堂で印刷された刊本である。明治22年3月までに沖縄県に報告した原本を、3月に退職して東京にもどった石澤の計らいで、当時石版印刷技術の評判を得ていた東陽堂において、ある程度の部数を印刷したと考えられる。『漆器考』の印刷された東陽堂は、石澤の上司であった上杉茂憲、池田成章、森長義と同じ米沢藩出身の吾妻健三郎によって明治9年に開業した。このような人のつながりで東陽堂からの発行にいたったのであろう。また、東陽堂からは、明治20年に東洋絵画会の『絵画叢誌』(『東洋絵画叢誌』が改題)も発行しており、美術行政とのつながりも深い⁽¹³⁾。この刊本は、県内所在の『漆器考』でも複数確認できる(琉球大学附属図書館伊波普猷文庫所蔵本、同仲原善忠文庫所蔵本、沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫所蔵本など)。

いま一つは、翌年の1890(明治23)年11月に、石澤の著作として同じ内容で東陽堂から印刷発行がなされている刊本である。第3回内国博(開催期間:3月26日~7月31日)に「沖縄県庁御蔵判」が展示・配布がなされ、開催後に石澤個人の著作として世に出した可能性が高い。また、この年には、柴田是真、池田泰真、小川松民らが中心になり日本漆工会が創設され、『日本漆工会雑誌』も発行されている。この日本漆工会には、沖縄の会員として米田惣四郎も早い段階から参加している(M27頃か?)。こうした流れも、石澤が個人の著作として『漆器考』を刊行する背景として考えられる⁽¹⁴⁾。

従来の認識は、新任知事・福原の殖産工芸への取り組み指示をきっかけにその編集が始まるという枠組みで成立過程をとらえることが多い。しかしその動きは1886（明治19）年2月山県有朋内務大臣の来沖まで遡る。この山県の沖縄諸島及び五島、対馬を巡回視察は「南航日誌」で報告されており、それには沖縄の物産について次のように述べられている。

（前略）物産ハ黒糖ヲ最トス。近時改良シテ赤糖ヲ製ス。又飛白、紬、上布、漆器、錫細工等著名ナリ。然レトモ商工概ネ資産ナキヲ以テ需要者アレハ之ヲ製スト。雖モ平素多額ノ製造ヲ為シ市店ニ販売スル者ヲ見ス。若シ之ヲ保護奨励シ其販路ヲ広メハ物産ノ繁殖ハ未ダ今日ノ如キニ止マラサルヘシ。

（後略 句読点は著者による）

黒糖赤糖や織物、漆器、錫などの物産を保護奨励し、販路拡大へ向けての殖産化が示されている⁽¹⁵⁾。こうした工芸産業奨励への動向を受けて、先述の福原知事の指示へと繋がるのである。

また、山県の報告に見る琉球漆器産業の保護奨励への方向性と同様に、当時の殖産工芸意匠・図案への取り組みの影響を見ることができよう。さらに山県来県前年の1885（明治18）東京で開催された〈繭・糸・織物・陶・漆器共進会〉においても、産業工芸について各地独自の図案改良が求められている。当時勸業課長心得であった石澤の中でも重要な殖産工芸品の漆器図案への関心は強かったであろう。1888（明治21）年に、意匠条例が発布されると、内国勸業博覧会や農展などで〈図案〉が出品され、内務省勸業の特許局などが意匠審査指導に乗り出した時期にも重なり、琉球独自の図案重視の勸業政策取り組みが要望される時期でもある。

こうした、殖産興業政策の動向を受け、勸業課課長・石澤を中心に『漆器考』は成立したのである。二つの刊本の意義づけとして、県庁版発行本の最大の目的は、沖縄県行政・県内の漆器産業参考報告書であり、後年の石澤の著作刊本は、日本漆工文化の中に琉球漆器を認知させる役割とともに広く一般に琉球漆器の特色を示すカタログ（型録）的な役割も担う著作と位置づけられる。石澤が示した沿革の結語で述べた「前略第二回勸業博覧会以降面目を改めたる者少なしとせず願わくば當業者尚左の様式を玩味し且つ見聞を博くし更に意匠を煅煉し以て別模範を案出するに至らば昔日の盛域を凌駕する豈難き事と為さざらんや」という

表現からも、第2回内国博覧会評価を考慮し、王府時代の伝統を踏まえつつもその意匠改善の必要性の意図が伺えるのである。

産業工芸品としての琉球漆器は、明治20年代から寄留商人や地元の民間工房が活発に創業し、行政側の積極的な奨励取り組みを伺い知ることが出来る。この頃の沖縄では、明治期から戦前昭和期の代表的な琉球漆器の工房とし活動している民間漆工房が創業を開始する。1887（明治20）年5月には米田惣四郎が（那覇市西）を創業し、1895（明治28）年4月には小嶺幸之が小嶺漆工場（那覇市西）、5月には、米次源吉が米次漆器製造工場（那覇市西）、8月には安里成森が安里漆工所（那覇市若狭町）、そのほか浅田漆器店、山田丸山漆器店、真栄田漆器店が次々と創業を開始している⁽¹⁶⁾。

1890（明治23）年の第3回内国勸業博覧会には、漆器出品では、膳類⁽³⁸⁾、椀類⁽³⁹⁾、盆類⁽³⁷⁾、重箱⁽²⁶⁾、切溜⁽¹⁾、菓子器⁽⁴⁰⁾、弁当箱⁽¹⁷⁾、食籠⁽¹⁾、飯次⁽¹⁰⁾、茶台⁽¹⁰⁾、広蓋⁽⁸⁾、硯蓋⁽³⁾、皿類⁽²⁴⁾、盃洗⁽²⁾、食卓⁽²⁾、煙草具⁽²⁷⁾、文庫類⁽⁶⁾、棚類⁽¹⁾、卓上類⁽³⁾、硯箱⁽¹⁷⁾、料紙箱⁽³⁾、手箱類⁽¹⁾、筆筒⁽¹⁾、針箱⁽³⁾、屏風類⁽¹⁾、額⁽¹⁾、花瓶⁽²⁾、花台類⁽¹¹⁾、香合⁽²⁾、雑具⁽⁵⁵⁾、29種（雑具をのぞく）の漆器合計411点と豊富な出品がされている⁽¹⁷⁾。

このように琉球漆器は行政側の後押しを受け、織物や水産物と共に、国内外の万国博覧会、各種共進会などへ積極的な出品がなされ、有力な産業工芸品・輸出品として殖産化が進んでゆく。

(3)「林政八書」編纂について

ここでは、野々村が石澤兵吾の業績の一つとして紹介した「林政八書」編纂について、触れておこう。

1883（明治16）年12月に、農商務省から国内の農書編纂のため、〈農政農業に関する古文書及び旧記類すべて〉農書に参考すべき資料に関して題名・目次などを調べ、農商務省農書編纂掛へ提供するようにとの通達（12月7日 官報134号）があった。年が明けて1月11日にはこの通達内容についてより詳しい彙報が出されており（官報158号）、農商務省にある農事関係書名（明治以前の著述のみ）が公表され、それらと重複しない資料報告を求めている。その際公表された農商務省所蔵の琉球関連書は、「琉球蘭作法」（大蔵永常著）、「琉球馬書」（著者年月不詳）、

「琉球国誌」（一冊、著者年月不明）、「南方海島志」（2冊、富南秋・寛政3年）、「琉球物産志」（5冊・坂上登・明和年間）、「南島志」（5冊・源君美・享保年間）、「中山伝信録・物産考」（4冊・田村藍水・明和年中）、「琉球談」（1冊・森島中良・寛政年中）等が確認（著者・発行年月は官報記載のまま）できる¹⁰⁸。

こうした通達を受け沖縄県庁内でその作業は、明治17年に本格的に始まったといえる。この農書編纂事業で沖縄県が行なった作業の詳細は不明であるが、王府時代の農政資料が県編纂課に収集・整理された。沖縄県には明治15年5月に編纂課ができ、地誌編纂係を含めて約2年半の期間設置されたことが確認できる。この編纂課は明治18年には無くなっていることから明治国史編纂・農書編纂などの中央での事業に連携しての編纂課設置及び廃止と考えられる¹⁰⁹。中央からの通達を受け、その編纂作業にあたった地方からは農書・地誌類が提供され、それをうけて農商務省は翌年（1884）の12月に『興業意見』をまとめている。こうした事業がすすめられる中で、置県後に山林荒廃が進んでいた県では、県に集められた王府時代の森林政策資料をまとめて編集している。上杉県令時（明15年）からの懸案となっていた林業再建のため王府時代のシステム（旧慣法）を再び採用し、そのマニュアル本として、大書記・森長義の下、石澤とその部下（仲吉朝愛、太田祥介、黒川作助、仲嶺眞愛）の勸業課（表3参照）が『林政八書』の編集にあっている。『林政八書』は、蔡温の三司官時代（1737～51年）に公布された7つの森林法令と、1869（明治2）年に示達された森林関係の訓令を加えた編集で、西村捨三県令が名付け、森と石澤が序文を寄せ1885（明治18）年に沖縄県から発行されている¹¹⁰。また『林政八書』刊行の背景に、山林界の発達を目的とした「大日本山林会」（明治15年創立）活動展開と連動した点も指摘しておく。

3、石澤兵吾と絵師たち

(1) 博覧会と沖縄県庁と絵師—琉球の絵師との交流—

博覧会と沖縄の美術（絵画）との関係から捉えると意外にも、石澤兵吾の名前が挙がっている。

現在東京国立博物館に所蔵されている琉球資料は、琉球処分後に設置された沖縄県から1884（明治17）年から1885（明治18）年に購入された資料、明治20年前後で収集された田代安定、笹森儀助、徳川頼貞氏らの寄贈品などで構成されてい

る。その中には約47点の絵画作品があり、1800年代に収蔵された絵画作品27点に注目してみよう。その収蔵時期は①1881（明治14）年7月②1884（明治17）年7月③1885（明治18）年5月の三期に分けられる。

①は、王府の最後の絵師・友寄喜恒（恵光翰）の沖縄人物図3点（「按司夫妻図（旧琉球藩按司夫妻遊山の図）」「ジュリ図（那覇遊郭辻村の娼妓、鼈甲簪を挿し知人の旅立ちを見送りに行く図。鼈甲簪は祝いの時など改まりたるときに挿すものなり）」「田舎婦女図（沖縄県人物図田舎婦人之図）」）で、1881（明治14）年7月に石澤が個人で寄贈している作品である。この友寄の3作品は、その年の第2回内国勸業博覧会（3月～6月末、東京・上野）に出品された可能性が高く、明治14年2月に沖縄県に赴任したばかりの石澤が勸業系の業務として携わったのだろう。閉会した時点の7月に寄贈されていることから、石澤は、友寄のその絵を買上げ、開館したばかりの博物館に寄贈した可能性が高い。

②1884（明治17）年7月所蔵の絵画は、沖縄県より購入された友寄喜恒の「花鳥図」、仲宗根真補（唐名：查丕烈）の「山水図」の2点である。これらは、③と同様に農商務省から依頼のあった沖縄物産（絵画）関係の2点で、王府時より絵師の友寄・仲宗根の作品が納品された。またこの年には第2回内国絵画共進会も開催されており、この共進会には佐渡山安豊も「山水画」を出品としている。いずれも出品窓口は、石澤の勤める県庁勸業課である。

③1885（明治18）年5月20日沖縄県から購入した絵画資料は、22点（「小児（自一歳至二歳）図、男児三歳図」、「女子三歳図、小児四歳図」、「男結髪図、処女結髪図」、「十五歳以下男子結髪の図、婦人結髪の図」、「膚筭の図」、「王子按司大礼服并通常服の図」、「王子按司大礼服、王子按司通常服後向図」、「王子夫人大礼服并通常服の図」、「ノロクモイの図」、「大夫法服の図、内侍法服の図」、「僧侶法服の図」、「首里之士族通常服の図」、「那覇士族夫人通常服の図」、「一般平民礼服の図」、「農夫の図」、「墓所図」、「偕船の図」、「馬艦船の図」、「唐船の図」、「沖縄県船図・石伝馬ほか」、「慶良間船の図」、「進貢船図 照屋筑登之親雲上筆」）である。

これらの絵画は、琉球・沖縄関係資料でも農商務省博物館局を通して沖縄県側へ収集依頼・購入されたものである。それらは明治17年7月から明治18年5月の期間で購入された琉球資料（農産物、陶器・染織物・漆器など）と共に収蔵され

たもので、すべての絵画資料が作者未詳の作品として伝わっている。

この時期に収集された資料は、当時沖縄側の担当吏員であった石澤兵吾、野村道安、本村朝昭らが関わったとされると佐々木利和は指摘している^②。この農商務省からの依頼のあった時期の沖縄県庁は、知事・西村捨三は元国王・藩王一家の尚泰、尚典の帰国・待遇問題で東京に出向くことが多く、地元での実務指揮を大書記・森長義が受持ち、石澤（課長心得6等属）を中心とした勸業課が中心に物産を取りまとめ、その後に東京への納品・購入決済事務などは庶務課の野村道安（8等属）、本村朝昭（庶務課御用掛准判任）が担当したという理解が当時の沖縄の状況から伺える。

この博物館依頼の作業が行われた1884（明治17）年は、石澤が課長を勤める勸業課は、例年に無く多忙な業務を抱えていた年とも言える。西村捨三県令の指示で百里から那覇への石畳を自動車使用に耐えられる幹線道路に整備し、また那覇港の御物城趾が整備され、そこに木造2階建の物産陳列館（博物館）が開設されている。それはその年の夏に帰国する旧国王・藩王・尚泰の歓迎の宴席会場（10月）でもあったため、その整備は急ピッチで進められたようだ。勸業課では物産陳列館展示用に県内物産は、もちろん古美術、絵画などの資料を整える作業も加わった。この物産陳列館（博物館）はその後、毎年のように訪れる日本政府要人たちの歓迎宴席会場としても使用され、地元では砂糖審査会及び集談会など開催し、管内の物産を蒐集し陳列して、一般商工業者の参考に資す目的の施設で使用された。約10年後の1895（明治28）年に、那覇市久茂地に南陽館が作られるまで、その機能を果たしている。

③の22点の絵図は、収集依頼の文章・目録などから収集された織物・装飾品などの<着用雛形>や<船>類や<墓>などの記録絵図として描かれていることが判る。明治16年にベルリン民族学博物館が琉球民俗文化財の蒐集を依頼した文章にも<着用雛形>の図式が写真の要望があり、絵師が自らの感性でテーマを設定し自由に描いた作品でなく、あくまでもその他の収集品を説明する用途を目的とした性格の絵図群である。

つまり、資料を収集した沖縄県庁依頼指示で描かれた絵図以外のものではなく、当然ながら作成時期も限られてくる。次にこの絵の作者について考えてみよう。

この作業を行う絵師は、②同様に琉球処分後県に県庁に奉職していた友寄喜恒

と王府の絵師として友寄と同年代でもある仲宗根真補ら王府と関りの深い絵師たちである可能性が高い。仲宗根の『琉球風俗絵図』（明治22年）の描き方にとっても似ている。特に22点の中の人物図は2人の画家によるもので、「首里之士族通常服の図」、「那覇士族夫人通常服の図」、「一般平民礼服の図」、「農夫の図」の4点が友寄の他作品の筆に酷似している。その他の人物図を仲宗根真補が担当し描いたのだろう。また作者未詳の5枚の船の絵図は、唐船や地図などの絵を得意とする友寄と同時期の絵師・阿嘉宗教（明治22か23年に死去）が描いたのかもしれない。美術分野からの詳細な研究が待たれる。こうした絵師達と深く関わるのが、当時勸業課トップの石澤である。

友寄喜恒（1845 - 1885、唐名：恵光翰、号：桃溪）は、友寄喜祥（恵氏家譜）の次男で那覇生れ。王府最後の絵師で、1885（明治18）年9月に40歳で亡くなっている。廃藩後の友寄について「県庁（土木課）に勤務し、石澤が魚釣・久場島（尖閣列島）探検の際にも派遣させられ、後年八重山で風土病に罹り死去した」⁹³、「幼い頃に母に死に別れたが、子供ながら好く母の似顔を描いて、祖母などに見せ、母に似ていますかというその真相を得るまでは何十度も描き換えたという親孝行のものであった。配県後は暫く県に奉職したこともあるようでその遺品は宜湾親方の肖像画や、大山真志喜の揚梅売女、辻の女郎などの風俗画が多いようである。」⁹⁴と真境名安興は述べている。その他に友寄作品は、1881（明治14）年頃描かれた「首里城図」「那覇絵図」（いずれも沖縄県立図書館所蔵）、その他沖縄県庁官員・横山扶（明治18年8月赴任）が「琉球風俗図」を所蔵している（現在：那覇市歴史博物館蔵）。

仲宗根真補（1843 - 1919ごろ、唐名：查丕烈、号：嶂山）は、首里生まれで1865年に絵師に登用されている。⁹⁵②の「山水画」、明治22年作成品には「琉球風俗絵図」、「七駿馬之図」、これらは石澤任期中に描かれた作品でもある。他に「沖縄県琉球国首里旧城之図」（明治27年、沖縄県立博物館・博物館蔵）、「月下神猫図」（明治32年）、「牡丹の図」などを残している⁹⁶。

友寄と仲宗根の後輩世代で石澤と関りの深い絵師に佐渡山安豊がいる。

佐渡山安豊（1852 - 1897）は首里生れ、唐名を毛永保、雅号：竹庭、菴法。父は佐渡山安宣、琉球王府絵師・佐渡山安健（毛長禮）の孫にあたる。これまで具体的な制作活動は不明とされていたが⁹⁷、明治17年頃から佐渡山安豊は、県庁の

勸業課御用掛として勤めており、県勸業課や庶務課の必要な記録絵図を担当していたようである（表3参照）^㉑。友寄と佐渡山の交流関係は現在確認できないが、安豊に師事していたのが比嘉盛清（号：華山）で、比嘉盛清は友寄が描いた風俗絵図（人物図）と同様の構図モチーフ作品を多く残している。大変興味深い問題である。

佐渡山は、友寄・仲宗根とともに絵図などの制作や、上司の石澤の依頼で『琉球漆器考』の絵図を手がけている。さらに農商務省主催の第2回内国絵画共進会（明治17年、東京・上野）にも「山水画」を出品している。

東京国立博物館所蔵の友寄・仲宗根・佐渡山の作品は、沖縄県庁が窓口となった博覧会や共進会などへの出品であり、先に指摘した〈着用雛形図〉、他の絵図も、彼ら自身が自由な活動の下で自由にテーマを選び決定し描いたとは理解しにくい。つまり王府最後の絵師・友寄喜恒は、琉球処分後もすぐに在野に下ることなく、明治14年から亡くなる明治18年頃までは、沖縄県庁業務と深く関わる絵を描いている。それは仲宗根真補も同様で、描くのは公的依頼性の高い作品群であり、明27年の作品「沖縄県琉球国首里旧城之図」も、この年那覇で開催される第8回九州沖縄8県連合共進会の展示関連作品と思われる。このことは琉球国時代の王府絵師のシステムは、琉球処分後も暫く続いていたということになる。県庁勸業課を通した仕事で絵師たちは重要な役割を果たしている。琉球処分後の絵師に関する従来の認識が強調する〈民間需要〉される絵師像は再検討する必要がある。またそれは県行政機関に属する佐渡山安豊や後述の薩摩藩絵師・木脇啓四郎が、石澤によって起用され仕事を残していることにもつながるのである。

石澤が勸業課長を勤めていた1887（明治20）年11月21日には、伊藤博文総理大臣、大山巖陸軍大臣らが軍事視察で来沖しているが、その一行にフランス留学から帰国したばかりの画家でフランス流西洋画法を教える山本芳翠（37歳）が同行している。山本はこの来沖の際、「琉球東城旧跡眺望図」「琉球中城之東門」などの油彩画を残しており、この2作品は宮内庁が所蔵している。明治の沖縄は絵画の分野においても早い時期に近代システムに取り込まれていく。

石澤の勤務期間及び直後に開催され、沖縄側の出品がある美術関係博覧会（共進会）と出品にされた絵画は以下の通り。今回は、紙面の都合で簡単なリストの紹介のみとする^㉒。

- *1882 (明治15) 年 第1回内国絵画共進会 (東京・上野)
- *1884 (明治17) 年 第2回内国絵画共進会 (東京・上野)
 - ・佐渡山安豊「山水画」
- *1886 (明治19) 年 第1回東洋絵画共進会 (東京・上野)
 - ・安仁屋政伊 (号：篠林)「岩菊鷹菊」「鐘馗」^㉞
- *1887 (明治20) 年 第2回東洋絵画共進会 (東京・上野)
 - ・長嶺宗恭 (号：華国)「雪中山水図」
- *1890 (明治23) 年 第3回内国勸業博覧会
 - ・長嶺宗恭 (華国)「秋景秋水」 妙技賞受賞
- *1890 (明治23) 年 日本美術協会秋季展
 - ・佐渡山安豊「山水図」「仏桑花図」
 - ・比嘉盛清 (号：華山)「山水図」「旧風村女図」
 - ・仲宗根真補 (号：嶂山)「山水図」
 - ・長嶺宗恭 (華国)「雪中山水図」
 - ・亀川盛武「鶴図」

(2)薩摩の絵師・木脇啓四郎と石澤兵吾

『琉球漆器考』刊行にあたって、石澤が漆器図を描かせた絵師は、佐渡山安豊と木脇啓四郎であった。ここでは、木脇啓四郎と石澤兵吾との関わりを紹介したい。

木脇啓四郎の人となりについては、丹波謙治「木脇啓四郎と『萬留』」^㉞に詳しい。木脇の年譜^㉞によると木脇啓四郎 (名は祐尚^{すけなお}、後に祐業^{すけなり}、啓阿弥、藤渕)、薩摩藩城下士、木脇家分家 (次男家) の嫡男として、1817 (文化14)、父の赴任 (「島詰」) 先であった沖永良部島で出生し、14歳のとき、藩の茶坊主として出仕、大目付座詰茶坊主、御家老座詰茶坊主、御数寄屋御茶道、小頭寄と転じ、その後、花頭 (花道師範) となっている。また啓四郎は、1843～1853年の間に2度にわたる江戸詰を経験する。この期間に甲冑製造法を学び、武具・馬具・古器物に詳しい栗原信充 (1894 - 1870、字・伯任、号・柳庵・柳園) から有職故実を学んでいる。その後鹿児島では栗原と共に、藩の甲冑製造所を1864年に開設し、木脇はその責任者の任務とともに島津久光の指示を請けて薩摩藩版の刊行に関与している。さらに明治期には、鹿児島県勸業課課長・白野夏雲の依頼により『甕海魚譜』(明治

16) を、また『薩隅煙草録』等の編集にも参加する。啓四郎のその生涯を維新前後の薩摩藩文化事業発展に尽力した〈薩摩藩文化官員〉と丹波は位置づける⁸²⁾。

木脇は1874(明治7)年と明治19年から明治24年までの、計2回の沖縄での勤務が確認できるが、これまで詳細には知られていない。木脇啓四郎が沖縄で残した仕事を資料から見ている。

木脇(55歳)は、1871(明治4)年6月に博覧会御用のため東京へ出向している。これは翌年に開催される湯島大成殿で開催された博覧会(文部省博物館主催・古器旧物展示)での御用のための上京と考えられる。その年に木脇は13等出仕博覧会取調掛で『日隅薩巡回採摘品彙疏図』(5冊)の絵を担当し、収集展示される物産の記録を担当している。また、先述の明治16年開催された水産博覧会に図書部門に出品された『甕海魚譜』は3等賞を受け、評判を呼んだ。

木脇と沖縄の関わりで興味深いのは、1874(明治7)年の沖縄勤務(木脇58歳)である。琉球処分を前に政治的にも微妙な時期の沖縄勤務の実体を知る資料は未見であるが、有職故実・博物学に詳しい木脇の来琉は、前年に開催されたウィーン万国博覧会出品の琉球関係資料を扱った薩摩藩関連の仕事か、または、2年後に開催されるアメリカ・フィラデルフィア博覧会出品関連で当時琉球で担当業務をしている河原田盛美らとの仕事での来琉、さらに鹿児島県出身の伊地知貞馨(『沖縄誌』)の来流公務での関わりではないかなど推測される、こうした複数の可能性を今後詳細に検討する必要がある。

1886(明治19)年、2度目の沖縄勤務は木脇が70歳、沖縄県泉崎村古波蔵の農事試験場(1881年設立・国費経営)での勤務である。1891(明治24)年までの約6年沖縄に滞在している。木脇が70歳から75歳までの沖縄勤務であり、決して若くない高齢の木脇が、なにゆえに沖縄の地に赴任しなけりなかつたのだろうか。その背景には、4月から沖縄県令で赴任した大迫貞清(鹿児島出身)の意向、もしくは石澤が課長を勤める沖縄県勸業課の部下として、その前年の明治28年6月から沖縄県庁で勤務する田代安定(5等属)の影響が考えられる⁸³⁾。実際、田代と啓四郎は、鹿児島県勸業課課長・白野夏雲の元で博覧会関係業務を務め互いに関わりがあり、沖縄農事試験場を退職した後の明治24年5月には、田代と共に大島巡回を行なっていることから旧識の間柄といえる⁸⁴⁾。木脇の沖縄赴任後、石澤は絵図資料の依頼を木脇に何度か頼んでいる。その起用は、明治18年9月に

亡くなった県庁御用絵師の友寄喜恒の不在時期と重なりあうのである。

また、石澤は内国博や九州沖縄連合共進会で鹿児島県勧業課とは交流もあり、木脇の実績も情報を得ている可能性は高い。石澤の下で県庁業務関連の絵図を描く絵師には、佐渡山安豊が明治17年頃から確認できるが、佐渡山以前に県属であった友寄喜恒が明治18年9月に亡くなっていることから、高齢ではあるがその真写図作成の実力は折り紙付の木脇が多く起用されていくことになる。

6年の滞在で木脇が残した沖縄関係の足跡で、現在確認できる資料は次の6件となる。

- ①新納中三の依頼で名越左源太著『南島雑話』の写本作成（明治19～22年6月・鹿児島大学附属図書館蔵）。

新納中三（1832-1889）は、幕末から明治初期に薩摩藩の家老を務め、1885（明治18）年夏頃に県少書記になり兼務で奄美大島金久支庁長担当、黒糖流通改革に従事し島民の負債軽減に取りくむ。その時期に依頼された写本と考えられる。しかし、新納は1887（明治20）年10月までには少書記を退任している。その後木脇（祐業）の島庁本を底本に1916（大正5）年小出満が謄写し、1933年に永井竜一によってガリ版刷が刊行されている。

- ②石澤兵吾（沖縄県勧業課課長）の依頼で『琉球漆器考』絵図担当（明治20～21年、刊行は22年10月・東陽堂）。琉球の絵師・佐渡山安豊とともに作業がなされた。（本稿82頁参照）

- ③石澤兵吾の依頼で『花草類真写図』作成（明治20年7月～21年・刊行は明治23年 沖縄県立図書館蔵）。

木脇の後書き（明治23年12月12日）によると、第3回内国勧業博覧会陳列のために石澤から依頼を受け、1887（明治20）年7月頃から作業を初め1890（明治23）年4月には進上したようだ。『琉球漆器考』と共に当初、1889（明治22）年に開催予定の内国博用の資料として依頼作成された。しかし明治22年3月に石澤は沖縄県庁を退職し、さらに第3回内国博の会期が翌年（3月26日～7月31日）延期になり、完成進上もこの時期になったのだろう。しかし沖縄を離れた石澤は、農商務省総務局第4課勤務となり第3回内国博事務局を務めていることから、『漆器考』とともに何らかの形で展覽された可能性は高い。

④農商務省水産局報告書『沖繩水産誌』の魚譜図作成（明治22年3月刊行）。

『沖繩水産誌』は明治18年に独立部局で設立された農商務省水産局の技師・松原新之助らが明治21年4月～11月18日にかけて沖繩・鹿児島・宮崎エリアの水産調査した際の報告書で、調査協力者に勸業課長（石澤）や仲吉（朝愛）、本村（朝昭）、松村（嘉謝）、黒川（作助）ら当時物産に詳しい県属官員の名前とともに木脇啓四郎への感謝が書かれている（同書8頁）。また明治16年開催の第1回水産博覧会開催に関わった松原は、その際3等の褒賞を受けた『甕海魚譜』の魚譜図を担当した鹿児島県絵師・木脇を熟知している間柄で、絵図の依頼がなされたのだろう。

⑤その他・沖繩の風景画三点（明治22年頃作成、沖繩県立図書館蔵）

沖繩滞在中に描かれた風景画で、「牧港・首里・与那原風景」（明治22・墨スケッチ）、「本部間切風景」（彩色）、「琉球国王城城跡之図」（彩色）。沖繩滞在中に個人的に描かれた風景画か。

⑥「沖繩人物図」写本（鹿児島県立図書館蔵）

紙中に「明治二十四年三月試験場にて写す」とあり、27丁の写本の数枚に「木脇祐業」の名を確認することは出来る。木脇は1891（明治24）年2月13日に農事試験場に辞職願を提出しているようで、沖繩を離れる時期でもあり、写本中には友寄喜恒・仲宗根真補・比嘉華山が描く人物風俗図と同じ構図が描かれている。このことから当時沖繩人物風俗図に関する図帖が存在し、それを写したものと推測する。石澤指示でまとめられた友寄喜恒作成の県庁所蔵版が存在していたのか。

薩摩の絵師・木脇啓四郎は、1886（明治19）年～1891（明治24）年までの約6年程沖繩に滞在し、高齢ながらも沖繩農事試験場に属し、石澤に依頼され勸業・博覧会に関わる琉球産物の絵図を多く手がけた。明治期に入って鹿児島県勸業課課長・白野夏雲の元で携わった博覧会関連の業績と共に、近代日本の殖産政策に組み込まれていく早い時期の沖繩で、石澤や田代らとの関わりを持ちながら物産図を残しているのである。近代沖繩で多くの絵を残した沖繩出身の絵師（作家）と共に、記憶に止めたい人物である。

まとめ

今回は、1880年代の沖縄県庁勸業課（勸業係）の幹部官員として勤務した石澤兵吾（明治14年～明治22年まで勤務）を通して、琉球処分後間もない近代沖縄の文化・工芸における状況に注目した。近代日本で<富国強兵><殖産興業><近代化>のスローガンが華々しく謳われ始めたこの時期に、沖縄は大きな世代わりを経験する。新しく属する国家の施策は、勸業・経済面から急激な変化を沖縄にもたらしている。近代沖縄を閉じた社会として静態的に捉えるのではなく、常に外部世界（システム）との絶え間ない交流がなされながら変動する社会としてより動的な把握につながる視点を持ちたい。<旧慣温存期>と呼ばれる時期さえ、沖縄社会が政治的に不安定な要素が存在したとしても、毎年のように開催される大型の国内外博覧会（共進会）への参加、九州8県との経済的ネットワークの確立、博覧会・博物館で展示される沖縄文化の表象としての絵師の仕事の変化など、初期県政の10年間にも満たないこの時期に、いくつもの新しいシステムへの参加が沖縄社会において見られるのである。それは多くの島人たちの暮らしの中で生産された物産にほかならない。また、明治20年代の沖縄には、約2000人近い内地人が活動しており、古賀辰四郎（明治12年来沖）のような代表的な開発・商人なども多い。こうした経済的な新しい動きと同時に、旧士族層を中心とした経済活動（丸一商店など）も、時代に即した変化を見せることは従来の研究（西里喜行ほか）でも指摘されている。

本稿は、文化人類学的ポリティカル・エコノミーの概念である「文化集団が埋め込まれている、より大きな政治的・経済的な権力関係の構造の持つ決定的な影響力を視野に入れて、集団の構成員達が、どのように主体的に外部世界の影響に対処し、ローカルな文化を維持または変容させ、さらにグローバルな政治経済構造をも変化させる力を発揮できるか」の問題として、近代沖縄社会（特に文化・工芸分野）を捉える試みでもある。それはまた、今日に繋がる<伝統文化>が、「何故伝統としてあるのか」という伝統の創造問題の近代のあり様への思考に他ならない。こうした側面を捉えた詳細な事例・新たな資料発掘を積み重ね整理検討し、従来の沖縄研究で議論されてきた<旧慣温存>期の時間を、より細分化し理解することで近代の沖縄社会がよりリアルに捉えられると認識している。

(註)

- (1) 栗国恭子 2010「近代殖産興業政策と宮古上布」『宮古研究』11号 宮古郷土史研究会
- (2) この時期の沖縄県庁編纂課業務に関する具体的な研究は、輝広志 2010「沖縄県庁の〈文書管理〉に関する基礎的考察—県令時代—を中心に—」『立正史学』第107号、平良勝保 2009「明治17年の沖縄県旧慣調査とその背景」『沖縄文化研究』35 法政大学沖縄文化研究所、平良 2011『近代日本最初の「植民地」 沖縄と旧慣調査1872-1908』藤原書店がある
- (3) 大里知子 2011「官員知事の系譜」『沖縄県史各論編』第5巻近代第2部2章 沖縄県教育委員会。執筆担当の大里個人の認識というよりも、章立てをした沖縄県教育委員会の近代認識とでもいうべきか。
- (4) 沖縄県沖縄史料編集所編『沖縄県史料近代3』沖縄教育委員会、1980、361-366頁
- (5) 野々村孝男「東京国立博物館所蔵琉球資料展〈琉球・沖縄へのまなざし〉に寄せて」『沖縄タイムス』2003年12月12日。野々村による遺族への調査によって石澤の写真も発掘されている。写真1はその部分である。
- (6) 石澤の報告書に関しては、黒岩恒が(1900「尖閣列島探検記事」『地学雑誌』第12輯-第140巻 東京地学協会)で報告している。他に真境名安興「沖縄現代史」『真境名安興全集 第2巻』206-208頁
- (7) 年譜の職歴は国立公文書館蔵「職員録・明治17年1月、8月・職員録改(沖縄県)」A09054363600(本館-2A-016-04・職A00470100)、「職員録・明治18年2月・職員録改(沖縄県)」A09054376200(本館-2A-016-04・職A00532100)、「職員録・明治19年5月・職員録改(沖縄県)」(本館-2A-016-04・職A00587100)を参照し作成。
- (8) 高尾曜HP「蒔絵博物館」<http://makie-museum.com/sitcho.html>
- (9) 近代日本の国内外博覧会に関しては、山本光雄 1970『日本博覧会史』理想社、吉田光邦 1985『万国博覧会—技術文明的に』日本放送出版協会、吉見俊哉1992『博覧会の政治学—まなざしの近代—』中央公論社。國雄行2005『博覧会の時代—明治政府の博覧会政策』岩田書院などの文献が詳しい。

(10)(1)参照

- (11)國雄行 2004「博覧会時代の開幕」『日本の時代史21明治維新と文明開化』吉川弘文館、256頁
- (12)琉球の物産が初めて外国博覧会に展示されたのは1867（慶応3）年のパリ万博である。徳川幕府とは別に佐賀藩と薩摩藩が独自に参加し、薩摩：琉球国のコーナーを設けている。しかし琉球側の主体的に参加を決定した資料は未見のため、本稿ではフィラデルフィア博覧会を参加の初めとしている。
- (13)東陽堂は、明治22年には『風俗画報』を創刊、その編集の中心は大蔵省記録局に勤める山下重民（明治43年に離職）で、明治29年には森長義の協力を得て沖縄特集号を刊行（117号）している。
- (14)浦崎永錫 1974『日本近代美術史 [明治篇]』東京美術、673頁、及び日本漆工会編『漆工競技会出品目録第2次』1894、国立国会図書館蔵
- (15)沖縄県沖縄史料編集所編 1980『沖縄県史料近代3』沖縄県教育委員会 466頁
- (16)創業年は、沖縄県 1912『沖縄県勸業年報明治四三年』沖縄県知事官房 105頁
- (17)内国博覧会事務局「第三回内国勸業博覧会審査報告」、明治24
- (18)官報1883年1月11日、1883年10月6日、1884年1月11日
- (19)編纂課業務に関しては前掲輝論文参照 註(2)
- (20)加藤衛 1997 校注・解題「林政八書 全」『日本農業全集57 林業2』農山漁村文化協会。加藤の調査で5ヶ所（各1部ずつ）5つの底本が確認されている（241頁）。
- (21)東京国立博物館編 2002『東京国立博物館図版目録琉球 資料篇』東京国立博物館 247頁
- (22)佐々木利和 2002「東京国立博物館所蔵の琉球・沖縄文化財（琉球資料）について」『東京国立博物館図版目録琉球 資料篇』東京国立博物館 14 - 17頁
- (23)『真境名安興全集』3巻 琉球新報社 1993 114頁、石澤と共に魚釣・久場島視察に動向したという他記録は未見であるが、石澤が視察している時期に八重山で亡くなっているというこの伝承はあながち無視できるものでもない。
- (24)『真境名安興全集』3巻 琉球新報社 1993 138頁。全集文中は真喜志とあるが真志喜の誤植か。

- 25) 仲宗根真補『琉球風俗図』に関しては、上江洲均 1985「琉球風俗絵図」『琉球の歴史と文化』本邦書籍に詳しい。
- 26) 上江洲敏夫 1983「佐渡山安豊」項目『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス
- 27) (7)参照
- 28) 展覧会及出品については『沖縄文化の軌跡、1872-2007』（沖縄県立博物館・美術館、2007）『琉球絵画展』（文化の杜、2009）に年譜があるが、制作背景については詳しい解説はない。
- 29) 滝川守朗編 1886『東洋絵画共進会出品目録』今古堂
- 30) 原口泉・丹羽謙治ほか編 2005『薩摩藩文化官員の幕末・明治 木脇啓四郎『萬留』—翻刻と注釈—』岩田書院 3-25頁。木脇啓四郎晩年に近い自叙伝『萬留』を詳細な注釈と、年譜・人となりの紹介がなされている。
- 31) 30参照、年譜・26-36頁
- 32) 丹波謙治「木脇啓四郎と『萬留』」30)15頁
- 33) 「職員録・明治19年5月・職員録改（沖縄県）」国立公文書館蔵、（本館—2 A—016—04・職A00587100）
- 34) 30参照、前掲年譜参照
- 35) 30参照、年譜35頁
- 36) 沼崎一郎 2002「ポリティカル・エコノミー」綾部恒雄編『文化人類学最新術語100』弘文堂 176 - 177頁